



TITLE:

プルーストにおける人物描写: サン =シモンのパスティッシュと「ゲル マントのオ気」にみるモデルの問 題

AUTHOR(S):

禹, 朋子

CITATION:

禹, 朋子. プルーストにおける人物描写: サン=シモンのパスティッシュと「ゲルマントのオ気」にみるモデルの問題. 仏文研究 1996, 27: 175-193

ISSUE DATE:

1996-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137844>

RIGHT:

ブルーストにおける人物描写

—サン＝シモンのパステイッシュと「ゲルマンの才気」にみるモデルの問題—

禹 朋 子

サン＝シモン公爵の『回想録』はブルーストの愛読書であり、これが彼の作品に及ぼした影響についてはしばしば言及されるところである。しかしこの問題についての先行研究の多くが大きなテーマを論じるか、あるいは単なる個別のスルス探しに終始している感のあることは否めず、またその指摘の全てが必ずしもはっきりした影響関係を立証できているわけではない¹⁾。けれどもブルーストとサン＝シモンの関係のある限定された範囲において考えようとする場合、ブルーストが意識的に公爵をモデルにしたことがはっきり解るテキストは少なくともふたつある。その第一のものは、「ルモワヌ事件」に題材をとった一連のパステイッシュのうちのひとつ「サン＝シモンの『回想録』より」²⁾であり、もう一方のテキストとは、「失われた時を求めて」の中で「ゲルマンの才気」を描いた部分である。

1921年、「ゲルマンの方Ⅱ」および「ソドムとゴモラⅠ」の出版³⁾に際して、ポール・スーデーは「ル・タン」紙にその評を寄せた⁴⁾。これに対し、ブルーストはスーデーに宛てた手紙の中で次のように述べている。

Je ne sais si je ne vous ai pas déjà dit que ce qui m'avait poussé à écrire comme un pensum tant de répliques de la Duchesse de Guermantes, et à rendre cohérent, toujours identique « l'esprit des Guermantes », c'était la déception que j'avais eue, en voyant Saint-Simon nous parler toujours de « l'esprit des Mortemart », du « tour si particulier » à Me de Montespan, à Me de Thianges, à l'abbesse de Fontevrault⁵⁾, de ne pas trouver un seul mot, la plus légère indication, qui permît de saisir en quoi consistait cette singularité de langage propre aux Mortemart. Ne pouvant reconstituer dans le passé l'« Esprit des Mortemart », je fis la gageure d'inventer « l'esprit des Guermantes ». Hélas je n'ai pas le génie de Saint-Simon. Mais du moins ceux qui me liront, sauront ce qu'est l'esprit des Guermantes, ce qui était tout de même plus difficile à faire que de dire « cet esprit si particulier » sans donner la plus légère idée.⁶⁾

ここでブルーストが表明しているのは、「ゲルマンの才気」はサン＝シモンがその『回想録』

の中で言及している「モルトマルの才気」に触発されて書かれたものであること、そしてブルーストはこれをサン＝シモンとは全く異なった方法で描こうとした、というふたつのことである。パステイッシュがモデルに限りなく接近しようとする実験であるならば、「ゲルマンの才気」を書くにあたってブルーストは丁度逆方向からサン＝シモンを「手本」にしようとしたと言える。

これらのテキストが我々の興味を引くもう一つの理由は、そのいずれもが人物を描くことに重きをおいたものであるという点にある。問題のパステイッシュにはブルーストの友人が数多く登場して各々「ポルトレ」を与えられている一方、「ゲルマンの才気」を問題にした箇所も、ゲルマンの人間（といっても実質的な対象はほぼ公爵夫人に限られるのだが）の精神的特徴を読者に理解させようとした努力の結果なのだ、と今引用した手紙は述べている。パステイッシュのどこに誰の「ポルトレ」があるかを指摘することは容易である。しかし『失われた時を求めて』においては、統一的心理の総体としての登場人物というものがほぼ崩壊している上、ある人物の「描写」と「物語」の間の区別をつけることは自明の作業ではなく、そのためにこの作品における人物描写について述べることが一層困難になっていることを考えると、この手紙は小説中の人物描写についての考察を始めるにあたって一種の保証を与えてくれるわけである。少なくともその「才気」に関する限り、ゲルマン公爵夫人の性格は一貫性を持ったものとして描かれようとした、そして彼女の発言の一つ一つがその精神的特徴の描写なのだ、という保証である。

本論は、従って、共にサン＝シモンを出発点としているが、逆方向に発展させようという計画のもとに書かれたこのふたつのテキストを比較検討し、サン＝シモンを軸にブルーストにおける人物描写の持つ問題の一端を明らかにしようとする試みである。取り扱うべきテキストを特定し、その成立の事情を整理した後で各々の分析に入るが、まずパステイッシュに関する章ではブルーストがサン＝シモンの何を再現し、何を模倣しなかったかを検分する。それによって作中で人物が描写される際に大きな意味を持つポイントを確認しよう。続く章では「ゲルマンの才気」に関する部分においてその「ポイント」が如何に機能しているかを点検し、ブルーストの小説における人物描写の特殊性について考えたい。

テキストの選定

ブルーストは、先に挙げたもの以前に一度サン＝シモンのパステイッシュを発表している。1904年1月18日付の「ル・フィガロ」紙に掲載された「ヌイイーのモンテスキュー邸での饗宴（サン＝シモン公爵『回想録』よりの抜粋）」⁷⁾がそうである。しかしこの作品は最終的には「ルモワヌ事件」の中のパステイッシュに組み込まれて発表された。従ってここでは別途扱うことをしない。パステイッシュに関してはこの一点を確認するだけで良いであろうが、『失われた時を求めて』については、テキストのどの部分を問題にするべきかの決定はより複雑である。

冒頭に挙げたスーデー宛の手紙では、それが書かれた事情からして「ゲルマンの方Ⅱ」における「才気」の描写が問題になっている。確かにこの巻には、「ゲルマンの才気」という表現

がはっきり現れ、それについて他の場面に比べて集中的に述べられている部分が公爵夫人の晩餐会の場面の主に前半部に見られる⁸⁾。しかし読者はそのようなゲルマン家の人間の特徴、特に公爵夫人の特別な言い回しにはこれより前の巻ですでに接しているのではなかったろうか。とりわけ問題になるのは「スワンの恋」の中のサン=トゥーヴェルト夫人邸の音楽会(I, 325-337, ここでは彼女はまだレ・ローム大公夫人と名乗っている)、そして「ゲルマンの方Ⅰ」の中のヴィルパリジ夫人邸でのマチネの場面(II, 497-560)⁹⁾であろうが、これらの場面はいずれも「ゲルマンの方Ⅱ」における「才気」の描写と同様の動機から書かれたことが書簡にうかがわれる。

実は「ゲルマンの方Ⅰ」の発売時にスーデーに宛てた手紙の中で、ブルーストは冒頭に挙げた手紙と同様のことを既に述べている。

[...] les gens du monde sont si bêtes qu'il m'est arrivé ceci : agacé de voir Saint-Simon parler toujours du langage si particulier aux Mortemart sans jamais nous dire en quoi il consistait, j'ai voulu tenir le coup et essayer de faire un « esprit de Guermantes ». Or, je n'ai pu trouver mon modèle que chez une femme et non « née », Mme Straus, la veuve de Bizet. Non seulement les mots cités sont d'elle (elle n'a pas voulu que je dise son nom dans le livre), mais j'ai pastiché sa conversation.¹⁰⁾

そしてまた、「スワンの恋」の中で公爵夫人が発する言葉の少なくとも一つ（カンブロンヌ將軍の逸話とカンブルメールという名に関する語呂合わせ）はこのストロース夫人の発言をスルスとするものである¹¹⁾。つまり、書簡に見られるブルーストの言を信じるなら、「スワンの恋」で描かれている「オリヤヌスの才気」もまたゲルマンの各巻に現れるものと同様の状況下で書かれたということになる。

更に上記の問題のテキストの後、晩餐の場面の後半部分でも、ゲルマン夫人はその鋭い発言で招待客を驚かせることをやめず、またゲルマン以降の巻でも公爵夫人は読者に彼女の才気なるものの実例を示し続けるのであるが、これらのテキストの間に先験的に区別を設けて論じる合理的理由は現段階では特になく思われる。従って、問題の「才気」の現れる様々なテキストを、ここではことさら区別することなく取り扱うことにしよう。ただし実際に後の章で特に問題になってくる場面はそのうちのいくつかに絞られてくるであろう¹²⁾。

テキストの成立

問題のサン=シモンのパステイッシュの成立過程についてはミイによる解説に詳しいが、小説執筆との競合性について、次のことを確認しておこう。1908年2月から3月にかけて、ブルーストは3回にわたって「ル・フィガロ」紙にルモワヌ事件に題材をとった模作を発表する。そしてこれを一冊にまとめて出版することを計画するが、頓挫する。しかしこれで模作の執筆をやめた

わけではなく、この年の終り頃には、ロリスに宛てた手紙¹³⁾の中でシャトーブリアンのパスティッシュを書いた、サン＝シモンを読んでいる最中である、と述べている。また翌年2月には以前書いたサン＝シモンの模作を出版用に書き直したいので貸してくれるようモンテスキューに頼んでいる¹⁴⁾。けれどもそうした意図にもかかわらず、現在我々が読むことのできるサン＝シモンの模作はこの時書かれたものではない。ミイはその執筆時期を少なくとも1917年11月以降と推定している¹⁵⁾。模作集の出版についてガリマールと話し合いがもたれ、計画が具体的に動き出すのが1918年夏¹⁶⁾、『模作と雑録』が出版されるのはその約一年後、1919年6月末のことである¹⁷⁾。サン＝シモンのパスティッシュは事前に発表されることなく直接この著作の中で出版されるわけであるが、脱稿は1918年夏頃と思われる¹⁸⁾。

一方この頃、『失われた時を求めて』の先ほど問題になった部分の執筆、出版に関しては次のような状況であった。1918年11月30日、「ゲルマンの方」の組版が開始され、12月、第一の校正刷りができあがる。翌年6月、つまり『模作と雑録』出版の頃、ブルーストによれば「第一の」¹⁹⁾校正が作者に届けられている。もちろん「スワン家の方へ」はすでに1913年11月に発売済みであったし、「ゲルマンの方」は大戦のために出版作業こそ遅れたが、初稿（カイエ39-43）が1910年から1911年にかけて、清書が1912年初め頃、タイプ原稿が1913年春には作成されており、サン＝シモンのパスティッシュと「ゲルマンの才気」のテキストは、全く同時期に書かれたとは言えない。けれどもブルーストにあっては、パスティッシュの執筆が小説にとりかかる以前にのみ行われた活動ではなく、小説執筆中も継続して行われていたものであることは確かである。また、『模作と雑録』に収録されたサン＝シモンのパスティッシュは« à suivre »で締めくくられている。これは結局書かれはしなかったが、サン＝シモンのパスティッシュの続編が予定されていたからである。このことが意味しているのは、ゲルマンの巻が刊行された時、ブルーストは、まだサン＝シモン、そしてパスティッシュという創作形式からそう遠ざかってはいなかったということなのである。

パスティッシュにおける描写

「パスティッシュ」は模写、模作、などと訳されるが、モデルの何を「模す」ものなのだろうか。プチ・ロベールは *pastiche* を次のように定義している。

Œuvre littéraire ou artistique dans laquelle l'auteur a imité la manière, le style d'un maître, soit pour s'approprier des qualités empruntées, soit par exercice de style ou dans une intention parodique. (下線筆者)

ブルースト自身がここで「ルモワヌ事件」という主題を選んでいる以上、少なくとも彼が真似ようとしていたのはそれ以外の部分、つまり文体であると、当座の所は考えておこう²⁰⁾。

さて、では実際にこのパスティッシュの中でブルーストはサン＝シモンの何を真似ているのかというと、語彙、決まり文句、構文といった文体上の特徴に加えて、サン＝シモンのものの見方そのものを取り入れているのだ、とミイは述べている²¹⁾。つまり貴族としてのランクというサン＝シモンが固執した主題がこの小品の中心的主題の一つを成しており、これに付随して公爵夫人だけが使用を許される椅子への被い布、上席権、称号に対する権利など、当時問題にされた事細かな事項が、この種のエチケットに異常にうるさかった公爵の立場から語られることになる。また陰謀、毒殺、詐欺、同性愛、近親相姦など彼の『回想録』でしばしば取り上げられる話題が盛り込まれるのは、主にここからオルレアン摂政公、マントノン夫人、ヴァンドームなどの登場人物を借りていることによるものである。こうしたミイの指摘につけ加えるなら、話の展開上オルレアン公が中心人物となる以上、パレ・ロワイヤルとサン＝クルー離宮が舞台となることは当然の帰結であろう。

パスティッシュとは文体の模倣である、という先ほどの措定は、この作品では不十分であることは明らかである。また一方、本来の主題であったはずのルモワヌ事件が作中で問題にされる機会は実はわずかで、その際においても、事件はオルレアン公の陰謀と化学実験趣味、そしてそれに対する公爵の非難という極めてサン＝シモンの話題を引き出す契機を作るに留まっている。しかも作品の後半部はほとんどサン＝クルーでの宴会に出席した人物の描写に充てられていて、事件の陰はますます薄くなっている²²⁾。

しかし、このようにサン＝シモンのテーマが彼の『回想録』の人物、舞台、設定の中で展開していくこのパスティッシュの中には、極めて反サン＝シモンの要素がひとつあることを指摘しておかねばならない。それは同時代の友人たちに対してブルーストが過度なまでに好意的な「ポルトレ」を作中で献呈しているという行為そのものである。このことを理解するにはサン＝シモン以前まで時代を遡って遠回りする必要がある。

1660年頃を頂点とするある限られた一時期、文芸サロンで常連たちが互いの「ポルトレ」を書くことが大流行した。この流行発生の経緯をジャクリーヌ・プラティエは次のように説明している²³⁾。「ポルトレ」の起源は古代ギリシャ、ローマに遡ることができるが、そもそもはごく限られた偉人のみがその対象とされていた。この性格は17世紀のフランスにも残っており、当時はポルトレに書かれること自体がステイタスであり、価値を持っていた。従って、たとえばスキュデリー兄妹がその小説の中に同時代人をモデルとしたポルトレを書くと、モデルとなった人物は大変喜んだわけである。読者は作者が実在の人物を元にして書いていることを知っていたので本能的にモデルを捜すのが常であった。しかしスキュデリーはモデルを自らあかすことを拒んでいた。これがモデル探しの熱意にさらに拍車をかける結果となった。そのうちに読者たちは今度は自分で同時代人のポルトレを書いてみることを考え始める。実際、スキュデリーによるポルトレは、まねのできない、というほどのものではなかったのであった。こうしてポルトレの流行が始まる²⁴⁾。この流行の特徴のひとつは、自ら創作する一方、他人に自分のポルトレを書いてもらうことを重視している点にある。そのために手紙で誰かに注文し、頼まれた方は返信の中で依頼主のポルトレを披露するということが行われていた²⁵⁾。

限られた仲間同士の内輪で書かれるこうした「ポルトレ」が、結局は相手の賛辞という性格を強く帯びていたものであることは想像に難くない。ところでブルーストがサン＝シモンのパステイッシュを書くに当たってとった行動は、まさにこれら社交人のものだったのである²⁶⁾。たとえばアルマン・ド・ギッシュに対しては次のように働きかけている。まず彼はパステイッシュの計画を打ち明け、協力を求める。

Je vous enverrai bientôt deux livres nouveaux de moi et un volume de pastiches. Mais j'ai fort envie d'en retirer le pastiche de Saint-Simon²⁷⁾ où il était question de vous. Car je voudrais qu'au lieu de deux mots sur vous ce fût assez long. Pour cela il faudrait savoir ce que vous désirez, je peux très bien, si mon éditeur n'y voit pas d'inconvénient, garder Saint-Simon pour une autre série. ²⁸⁾ (下線筆者)

しかし執筆の時にはギッシュがヴァカンスに出かけてしまっていて連絡が取れず、ブルーストは結局ギッシュ本人に相談することなく原稿を仕上げることを余儀なくされた。そのことに対する苦情はかなり激烈な調子を帯びている。

Quand j'ai commencé le pastiche, ayant de causer avec vous de vous même [sic.] et pour être certain de dire exactement les choses que vous souhaitiez qui fussent dites, un besoin pressant, vous étiez parti en vacances. [...] Si au moins j'avais eu la satisfaction de parler de vous comme je l'avais rêvé! Mais privé de vos indispensables conseils, j'ai raté « mon » Guiche.²⁹⁾ (下線筆者)

ブルーストが何よりも気にかけているのは、自分の書くことが相手の気に入るかどうかである。この点についての懸念は何人もの友人に繰り返し述べられている。次に挙げるのはスーゾ公女の例である。

[...] il me semble que en ce qui vous concerne, étant donné la place que vous avez tenue dans ma vie pendant deux ans, je voudrais amorcer le portrait que je ferai de vous dans le deuxième Saint-Simon en mettant votre nom dans le premier (celui qui va paraître). Néanmoins je ne peux pas le faire sans être certain que la phrase (beaucoup moins élogieuse que je ne voudrais, qu'elle n'est pour d'autres, qu'elle sera dans le deuxième Saint-Simon où vous trônerez, mais j'ai été débordé par le manque de place) ne vous déplaît pas. Voici ce que ce serait (mais il faudrait que j'eusse votre assentiment ce soir si possible). [...]

Dites-moi je vous prie pour la phrase [...] je veux savoir si du moins rien ne vous y déplaît.³⁰⁾ (下線筆者)

もちろんパスティッシュの中に現れる人物の全てがこのような扱いを受けているわけではなく、ブリュメンタル夫人やミュラ家の人間のように作中で非難が向けられている人物もいる。そのような場合は、彼らが自分や友人の友人でないことが前提になっている³¹⁾。この友人関係にブルーストが気を遣うことも甚だしく、その最も極端な例の一つが、ガストン・ガリマール宛の手紙の中に見受けられる。

J'espère (et je suis *certain*) qu'aucune des personnes pour lesquelles mon Saint-Simon est sévère, n'est de vos amies, ni ne vous intéresse à aucun degré.³²⁾

こう述べた後、ブルーストはガリマールの知人であるオットー・カーンに言及し、その娘がブリュメンタル夫人の知り合いではないか、そのために自分のパスティッシュを読んで不愉快に思うのではないかという心配をしている。

[...] je n'ai jamais oublié le fin profil de sa fille, entrevue de très loin dans je ne sais plus quel hôtel (l'hôtel Plaza je crois). Je ne l'ai jamais vue de près, je ne la connais pas. Malgré cela, le souvenir persistant du profil fait que je n'aimerais pas qu'il y eut de ses amies malmenées dans ce Saint-Simon. Or une des femmes dont je parle sans aménité se trouvant être une Américaine (Me Blumenthal actuellement Duchesse de Montmorency) si je pensais que la jeune fille au fin profil pût aimer cette dame compatriote, je supprimerais le passage pourtant bien essentiel. Croyez-vous qu'elle la connaisse et l'aime?³³⁾

つまり、彼にとっては同時代の人間をこの作品の中でどう扱うかは、その人物が自分の交際圏内に占める位置にかかっていた。このことを端的に語ったものをストロース夫人宛の文面に見つけることができる。

Vous éveille un de mes scrupules en me parlant de la Princesse Lucien Murat [...]. Je n'écris jamais de mal des personnes que je connais. Et bien entendu je n'écrirais pas une ligne désobligeante sur elle qui a toujours été gentille (et plus) pour moi. Mais je ne me crois dû à rien envers les autres Murat, chez qui je ne suis allé qu'à des soirées de deux mille personnes et que je ne connais pas.³⁴⁾

このように作中で非難を受ける対象は自分とつながりのない人物の中から注意深く選ぶ一方、友人たちには徹底的に賛辞を贈るとというのがパスティッシュにおけるブルーストの実在モデルの扱いである。そのことはブルースト自身がモンテスキューに語っている通りである。

[...] il me semble que vous avez dû apprendre que dans un volume intitulé *Pastiches et Mélanges*, j'avais fait, sous le couvert de Saint-Simon un long portrait de vous ; que ce portrait n'est pas la simple reproduction de celui qui parut autrefois dans le *Figaro*, mais contient des parties et des louanges nouvelles. Et pour cela j'avais espéré recevoir un petit mot de vous, bien que vous n'eussiez pas reçu les livres.³⁵⁾ (下線筆者)

作者のみならず、その賛辞を受け取った本人もはっきりそのことを意識していたことは無視できない。著書の献呈を受けたモンテスキューは次のように返事している。

Le passage, que vous m'avez spirituellement et bénévolement consacré, s'augmente de traits nouveaux, dont le plus agréable prend une grandeur, allant jusqu'à satisfaire cette *équité*, que je mets au-dessus de tout ; il me reconnaît une *priorité* dans la louange de Madame de Noailles, et c'est un éloge qui durera aussi longtemps que la petite figure de dix centimètres, « inoffensive et monstrueuse ». C'est déjà gentil de donner des louanges ; mais des louanges qui mûrissent, au lieu de mourir, c'est la belle palme.³⁶⁾ (下線筆者)

賞賛，ということに関してはほとんど行き過ぎとも思われるのが実生活におけるブルーストの常であるにせよ，ここでモンテスキューがはっきりとパステイッシュの中の自分やノアイユ夫人の描写をブルーストからの「*louange*」，「*éloge*」として捉えていることは興味深い。1659年，流行のさなかに出版されたのポルトレ集の一つが *Recueil des portraits et éloges* と題されていたのを見ても明らかのように，この両者は当時同じ意味合いを持っていたからである³⁷⁾。そしてまた，モンテスキューの返答自体がブルーストの書いたものへの賛辞となっている。賞賛の交換，それが17世紀の，そして20世紀においても社交界のルールだったのである。

このようなサロンの創作は，少なくとも17世紀後半やサン＝シモンが執筆していた時代においては，回想録とは非常に異なったジャンルに属するものであったことは強調しておかねばならない。ブルーストはパステイッシュの内容について事前にモデル本人と打ち合わせたり，本人の了解を得ようとしていたことは先ほど見た。これが作家として一種異常な振る舞いであるばかりではなく，いかに回想録作家のものとかけ離れた創作態度であるかは，回想録というものの執筆事情を考えてみれば明らかである。サン＝シモンに限らず，回想録が一般に非公表，あるいは死後出版を前提にして書かれていたことを忘れないようにしよう³⁸⁾。そのおかげで作者は自らの視点（それはしばしば独断的なものである）以外の何物にも左右されることなく，高位の人間も含めた同時代人について自由に記述することができた³⁹⁾のだが，逆に言えば，そのような姿勢で書いたものが他人の目に触れると立場が危うくなる恐れがあったため，作者の存命中に公表することができなかったわけである。

このように、ブルーストはサン＝シモンを「模倣」するに当たって、文章に現れる範囲においてはあらゆる、といっても良いレベルでサン＝シモンのなものを再現し、本来の話題であるルモワヌ事件をないがしろにする程ですらあった。しかしその一方、『回想録』というジャンルの隠れたエッセンスである「視点」の再現は、社交を知った人間としてのブルースト自身のものと二重写しになって行われている⁴⁰⁾。このパスティッシュ中に見られる批判的記述は、必ずしも実在のブリュメンタル夫人やミュラ家の人々に苦言を呈することが目的だったのではなく、エチケットの違反者に対して雑言を浴びせることを辞さないサン＝シモンの独断を再現する都合上行ったことであり、ブルーストがこう言っているのはあながち嘘ではなからう。「[...] les choses désobligeantes pour certaines personnes ont été écrites, sans l'ombre d'intention malveillante, mais par nécessité technique [...]」⁴¹⁾。

おそらく、新たに書き加えてまで模倣集にサン＝シモンのパスティッシュを入れることにこだわった理由の一つは、その『回想録』の登場人物と同じ名を持つ友人たちを作中に登場させたいというスノップな欲求であったろう。そこに非歴史的な名前を持った友人たちも加わった。そしてこれらの友人を作中で扱うためにとった態度は「社交界」の人間のものではあった。この点、ブルーストは時代を誤ったとも言えるし（いわゆる「ポルトレ」の流行はサン＝シモンの一世代前の出来事に属する）、極めて当代的な振る舞いに及んだだけであるとも言える（なぜならそれが彼の实生活においては普通のことであったから）。いずれにせよブルーストはこの様にして反サン＝シモンの部分をパスティッシュに残すこととなったのである。このパスティッシュの抱える問題は、我々にモデル問題は二重になっていることを理解させた。サン＝シモンという作法上のモデルと、同時代人たちという材料と。そしてまた、これらモデルの扱いは作者の視点によって決定されるのであった。この処理が小説ではいかになされているであろうか。順を追って検討することにしよう。

小説における描写——「ゲルマンの才気」の例

先ほどは、原則として任意の主題にモデルとなる作家の文体を適用しようとする試み、パスティッシュにおいて、主題そのものがサン＝シモンというモデルの好んだものに侵蝕されている様子を確認した。同様に、（あるいは逆に）一族の才気という主題を真似るだけのはずである「ゲルマンの才気」のテキストでは、文章作成及び人物設定のレベルにおいてサン＝シモンがブルーストに影響を及ぼしているのが観察される。

作法上の模倣と考える第一の点として、身体的特徴の描写と精神的特徴の描写を並べている点が挙げられる。次のものはゲルマン公爵夫人による晩餐会の前半部分からの引用である。

Leur physique même, la couleur d'un rose spécial allant quelquefois jusqu'au violet, de leur chair, une certaine blondeur quasi éclairante des cheveux délicats, même chez les

hommes, massés en touffes dorées et douces, moitié de lichens pariétales et de pelage félin (éclat lumineux à quoi correspondait un certain brillant de l'intelligence, car, si l'on disait le teint et les cheveux des Guermantes, on disait aussi l'esprit des Guermantes comme l'esprit des Mortemart — une certaine qualité sociale plus fine dès avant Louis XIV — et d'autant plus reconnue de tous qu'ils la promulguaient eux-mêmes), tout cela faisait que [...] les Guermantes restaient reconnaissables, faciles à discerner et à suivre [...].

Les Guermantes — du moins ceux qui étaient dignes du nom — n'étaient pas seulement d'une qualité de chair, de cheveux, de transparent regard, exquise, mais avaient une manière de se tenir, de marcher, de saluer, de regarder avant de serrer la main, de serrer la main, par quoi ils étaient aussi différents en tout cela d'un homme du monde quelconque que celui-ci d'un fermier en blouse. [...]

Les Guermantes n'étaient pas moins spéciaux au point de vue intellectuel qu'au point de vue physique. Sauf le prince Gilbert [...], les Guermantes, tout en vivant dans le pur « gratin » de l'aristocratie, affectaient de ne faire aucun cas de la noblesse.⁴²⁾ (下線筆者)

このように人物を身体と精神に分けて描写する姿勢は17世紀の「ポルトレ」の定石である⁴³⁾。サン＝シモンはその見出しに「ポルトレ」の他にしばしば「キャラクター」という語を使うが、だからといって後者には身体描写が欠けているわけではない⁴⁴⁾。そこまで身体と精神の分割描写、そしてそれらの並置は当然の前提事項になっていたと考えられる。このような手法がここまではっきり明示的に用いられることは、『失われた時を求めて』の中では、他に類を見ないことである。

第二の手法はパラレルである。「スワンの恋」では一族の寵児であるオリヤヌと、同じくゲルマン家の縁続きでありながら皆から疎遠にされているガラルドン夫人、スワンとオリヤヌの会話の洗練度とそれを解しない女主人、サン＝トゥーヴェルト夫人⁴⁵⁾がふたつの対照を成しているが、これと同じことがゲルマンの巻でも行われている。この巻で「ゲルマンの才気」が語られるのは、クールヴォワジエの人間の硬直したものの考え方との比較においてであるし、またクールヴォワジエの人間がオリヤヌの才気に対して示す批判的な反応は、バルム大公妃の盲目的な感嘆と対比されている。この方法によって、ゲルマン夫人と同時にクールヴォワジエの人間、そしてバルム大公妃の人物像⁴⁶⁾が読者に提示されることになる。このパラレルという手法もまたサロンのポルトレ、あるいはサン＝シモンの回想録においてもしばしば用いられるものであった⁴⁷⁾。モルトマル家の才気の有無に関してはモルトマル公爵の例がある。かれはその家系のゆえにかの有名な才気を持ち合わせていると自負してるのだが、サン＝シモンはこれを手ひどくこきおろしている⁴⁸⁾。

人物設定の上でもサン＝シモンが影響していることを示すものとして、モンテスパン夫人に関

する次の文章ほど適当なものはないであろう。

Il n'était pas possible d'avoir plus d'esprit, de fine politesse, des expressions singulières, une éloquence, une justesse naturelle qui lui formait comme un langage particulier, mais qui était délicieux, et qu'elle communiquait si bien par l'habitude, que ses nièces et les personnes assidues auprès d'elle, ses femmes, celles que, sans l'avoir été, elle avait élevées chez elle, le prenaient toutes, et qu'on le sent et on le reconnaît encore aujourd'hui dans le peu de personnes qui en restent : c'était le langage naturel de la famille, de son frère et de ses sœurs.⁴⁹⁾ (下線筆者)

しばしばの訪問による才気の伝播という設定についてすぐに思い浮かぶのは、サン＝トゥーヴェルト夫人の所でオリヤヌとスワンが交わす会話に付随して述べられる次の指摘である。

[...] Swann et la princesse avaient une même manière de juger les petites choses qui avait pour effet — à moins que ce ne fût pour cause — une grande analogie dans la façon de s'exprimer et jusque dans la prononciation. Cette ressemblance ne frappait pas parce que rien n'était plus différent que leurs deux voix. Mais si on parvenait par la pensée à ôter aux propos de Swann la sonorité qui les enveloppait, les moustaches d'entre lesquelles ils sortaient, on se rendait compte que c'étaient les mêmes phrases, les mêmes inflexions, le tour de la coterie Guermantes.⁵⁰⁾

そしてこの会話の粹なところは決して「仲間」ではないサン＝トゥーヴェルト夫人には理解されないものであった。

しかしこの例にも増して興味を引くのは、ゲルマン公爵夫人とヴィルパリジ夫人との関係である。この二人は単なるおばと姪というだけでなく、ヴィルパリジ夫人はオリヤヌの育ての親である。ゲルマン嬢の父の両親に関する記述は一切なく、小説中ただ一カ所で、オリヤヌはその従弟であるシャルリュス氏と一緒に育ったと述べられているが⁵¹⁾、これもそれ以上の説明はない。このような設定は、小説の全体からすれば不自然なものである。少なくともその必然性はないし、このことが他の箇所でも再度問題になることもなければ、この設定があとで生きてくるような仕掛けもない。この不合理とも思える人物関係は、先ほど挙げたモンテスパン夫人とその姪たちとの関係を再現しようという意図が優先された結果なのではないだろうか。

小説全体において、ヴィルパリジ夫人は、姪と同じほど輝かしい人物ではなく、むしろ社交界の中心から遠ざけられた老女として描かれている。しかし、やはり不自然なことには、公爵邸の晩餐の場面から逸脱して「ゲルマンの才気」が長々と語られる部分では、結婚前のオリヤヌはヴィルパリジ夫人と同じく理知だけが価値あるものだと言ひ、その信念を行動に表すことで社交界の人気をさらっていた、とされているのである。つまりオリヤヌは、その他の場面では

はかばかしい評判もないこのおばをまねることによって才気をふりまいていたことになる。また、彼女の結婚を一族の「ジェニー」によって取り仕切ったのはこのおばであった⁵²⁾。これはモンテスパン夫人に関するこの一節を下敷きにしているように思われる。「*Sa dévotion, ou peut-être sa fantaisie, était de marier les gens, surtout les jeunes filles [...].*⁵³⁾」

更にサン＝シモンの影響は、機知に富んではいるが意地が悪いというゲルマン公爵夫人の基本的な性格設定にまで及んでいるとも考えられる。サン＝シモンがモルトマル家のエスプリなるものの実例を示していないことにブルーストが不満を表していたのは先ほど見た通りである。しかし例こそ挙がっていないが、その「エスプリ」がいかなる性質のものであったかは、実は『回想録』から容易に解ることなのである。たとえばティアンジュ夫人については次のように書かれている。「*On prétendait qu'elle [Mme de Thianges] avait encore plus d'esprit que Mme de Montespan, et plus méchante.*⁵⁴⁾」そしてその妹、モンテスパン夫人の意地悪さがどれほどであったかといえば、宮廷の人々が悪口を言われるのを恐れて彼女の居室の窓の下を通るのを避けたほどであったとサン＝シモンは伝えている⁵⁵⁾。

このようにサン＝シモンの『回想録』は、いくつかの点において小説の構成、そしてその描写の性質を左右するゲルマン公爵夫人の性格の決定要因となっていると思われるが、では小説におけるモデル人物の処理はどうなっているのか、再び書簡などによって後づけてみよう。ブルーストは、「ゲルマンの方Ⅰ」発売時にストロース夫人自身に宛てた手紙で、この巻の中で言われる機知に富んだ言葉のモデルは彼女であることを本人に告げている⁵⁶⁾。しかし小説中に現れるそれらの言葉は必ずしも全体として良い文脈において使われているのではない。ゲルマン夫人の召使いへの意地悪、パルム大公夫人の無理解への当てこすりなどの例が積み重ねられていくとき、彼女の発言の一部が自分がかつて言ったことだと知って嬉しい人間があるだろうか。もちろん読者には、どれが実際にストロース夫人の言った言葉かは解らない。しかしだからといって相手の気分を害する危険がないわけではない⁵⁷⁾。ブルーストはこの問題をどう考えていたのであろう。パスティッシュに関してブルーストが自分の書くものが知人、友人に与える印象について異常なまでに敏感であったことは先ほど見た通りである。彼がこのことに無関心であったとは思えない。

ブルーストは友人が自身を小説中の人物と同一視するのは困ったことだと考えていた様である。アルビュフラは、ゲルマンの巻に描かれているサン＝ルーとラシエルの関係が自分とルイザ・ド・モルナンのそれをなぞったものであると考えてブルーストと絶交したと言われている。彼との絶交についてブルーストは次のように嘆いている。

Beaucoup de gens croient que Saint-Loup est d'Albufera, je n'y ai jamais songé. Je suppose qu'il le croit lui-même ; c'est la seule explication que je trouve à sa brouille avec moi, laquelle me fait beaucoup de chagrin, d'autant plus qu'il venait de me rendre service.⁵⁸⁾

友人からこの種の苦情が来る恐れは承知していたと思われるが、その一方、ある人物の発言その他を小説に取り入れたことを当人にわざわざ知らせたりもしている。これはどう説明できるだろう。ガレ夫人宛の手紙にそのヒントが読みとれる。

Je crois qu'il s'est glissé un malentendu dans ce que je vous ai dit que j'avais écrit des choses sur vous, et, ce qui n'a aucun rapport, que j'avais écrit des Pastiches qui n'étaient pas aimables pour tout le monde. [...] Les seules lignes de cela qui paraîtront dans quelques jours, sont dans le second *Swann* (*A l'ombre des jeunes filles en fleurs*), la chose du rossignol et naturellement sans vous nommer. Quant aux pastiches qui paraîtront en même temps j'y nomme au contraire les gens mais pas vous [...]. Seulement je ne voulais pas puisque les noms y sont, écrire sur vous sans vous soumettre la chose.⁵⁹⁾ (下線筆者)

作品中でモデル人物を名指しするかどうかはブルーストにとってパスティッシュと小説を区別する重要なポイントであったことが窺われる。しかしモデルにすれば自分の名前が挙げられているかどうかのみが問題なのではない。モデルの名を作中で言明しなければ、相手に何も負ってはいないというものではない。実際、このような苦情は寄せられていたのであって、それにも拘わらずブルーストが小説中で望むままに実在の人物からディテールを汲み取っていたのは、彼らと登場人物は全く別のものだと考えていたからだと推察される。自分をオデットのモデルに使ったと言って非難を寄せたローラ・エーマンに、ブルーストはこう答えている。

Odette de Crécy, non seulement n'est pas vous, mais est exactement le contraire de vous. [...] Il n'y a peut-être pas un autre de mes personnages les plus inventés de toute pièce, où quelque souvenir de telle autre personne qui n'a aucun rapport pour le reste, ne soit venu ajouter sa petite touche de vérité et de poésie. Par exemple [...] j'ai mis dans le salon d'Odette toutes les fleurs très particulières qu'une dame « du côté de Guermantes » comme vous dites, a toujours dans son salon. Elle a reconnu ces fleurs, m'a écrit pour me remercier et n'a pas cru une seconde qu'elle fût pour cela Odette. [...] J'ai signalé dans un article des *Œuvres libres* la bêtise des gens du monde qui croient qu'on fait *entrer* ainsi *une personne* dans un livre. [...] J'ai cessé depuis longtemps de dire que Madame G[reffulhe] « n'était pas » la Duchesse de Guermantes [...]. Je ne persuaderai aucune oie.⁶⁰⁾

一瞬の間だけ似ていたからと言ってそれでオデットがエーマンであるわけではないし、ゲルマン夫人がグレフュール夫人だというわけではない。これが彼の主張である。現実にあったことが小説中に見出されるからといって小説が現実だということにはならない。小説の中の人物は「作

中人物」であって、実在の「人間」ではない、というわけである。ブルーストがモデル問題で知人からの苦情に反論する時、あるいは機知に富んではいるが意地の悪いゲルマント公爵夫人の言葉のモデルはあなただとストロース夫人に語る時の自信は、この信念からくるものであったろう。しかしこのような捉え方はブルースト自身がここで絶望的に述べている通り、同時代人にはほとんど理解されなかった様である。作者のものとは食い違うこのような受け手の側の意識は出版時においてのみ問題になったのではなく、ペインターによる伝記が出版された頃はまだ厳然として存在していたし、現代においてもそれが続いているとはいえないとは誰が言えよう？

しかし「失われた時を求めて」に関してはその責任の一端は作者にもある。彼は時折実在の人物を実名で、しかも読む者に実在の人物として捉えられることを期待して小説中に滑り込ませ、そしてそれはしばしばその人物に賞賛をおくる目的で成されるからである。たとえば彼はゲルマント大公邸での夜会にすばらしいドレスの美人を登場させ、これを見たゲルマント公爵夫人にシメー大公に向かって次のように言わせている *« Votre sœur est partout la plus belle ; elle est charmante ce soir⁶¹⁾ »*。当時の社交界の人間にとって、これが大公の姉のグレフェール伯爵夫人のことを指しているのだと理解するのは容易なことであったろう。次のフェヌロンの例はより直接的である。語り手の最も大切な友人だった人物として、彼はこう形容されている。 *« l'être le plus intelligent, bon et brave, inoubliable à tous ceux qui l'ont connu, Bertrand de Fénélon [...]»⁶²⁾*。あるいは主人公の二度目のバルベック滞在の折にホテルで出会うマリー・ジネストとセレルト・アルバレの例はよく知られているところである⁶³⁾。

ゲルマント公爵夫人の例に戻ると、ストロース夫人さえ許可していれば、ブルーストはこのモデルの言葉を彼女自身のものとして作中に入れていたかもしれない。そうすればゲルマント夫人の人物像は異なったものになっていたかもしれない。ブルーストは「ゲルマントの方Ⅰ」を発売前にストロース夫人に贈ったが、その時彼女に宛てて書かれた手紙はそのようなことを考えさせる。

*[...] je veux vous envoyer mon livre avant qu'il ait paru [...]. Tout ce qui dedans est spirituel, est de vous. Vous ne m'avez pas permis de mettre votre nom au-dessus des « mots » parce que c'était un roman. Je prendrai ma revanche dans de seconds Pastiches car vous êtes plus tolérante pour ce « genre ».*⁶⁴⁾

小説はパスティッシュとは別の次元に属する作品である。たとえ現実存在するものを素材としても、作品中の世界はリアル・ワールドではなく創作物なのだと主張するブルーストの言は単なる詭弁ではないとしても、しかし彼はこれをまた自ら容易に裏切ってしまう。そしてその方法は、まさにサン＝シモンのパスティッシュで行ったのと同じ、社交人の方法によってであり、「ゲルマントの才気」に関する部分もそうなる恐れは十分あった。ゲルマント公爵夫人が今我々が読む小説の中で発する数々の言葉を与えられ、我々の知っているゲルマント公爵夫人となったのは、ストロース夫人が小説中に実名で描かれることを拒否したという外的事情にも依るものである。

パステイッシュにおいて、ブルーストは文章上の特徴以上のものをサン＝シモンから巧みに写し取っている反面、本来の作者の視点はブルーストの社交的な態度によって重要な点で裏切られていることを見た。逆にサン＝シモンとは異なった方法を目指したはずの小説中でも、ブルーストはほぼ同様の態度をとっていたのであった。なるほど実例が豊富に挙げられているかどうかという点からすれば、ブルーストの書いたものは、彼が宣言している通り『回想録』の記述とは異なっていよう。また文体上の特徴を真似たことは、ゲルマント邸における晩餐の場面に一種の擬古典調を醸し出したという点で効果的であったかもしれない。しかし人物設定にまでサン＝シモンの影響を入れることは、本来の作品の内部世界に不整合を引き起こす結果となった。一方、作者の視点についても、小説家ブルーストの視点は、常に社交人ブルーストの視点によって混乱させられる危険が潜んでいて、ゲルマント夫人の描写に関する部分についてもその恐れは否定できない状況であった。結果的にはモデル人物の意向に従ったためにそのような事態には至らなかったのではあるが。

このことがあらわにするのは、ブルーストの小説における人物描写、そしてその根本となるはずの人物設定の危うさである。彼にあってはまずサン＝シモンの世界を真似たいという欲求があり、ストロース夫人独特の言い回しを作品中で再現したいという希望があり、それらの目的のためにゲルマント公爵夫人という人物が創作されたとはいかないまでも、利用されたのである。それはたとえばグランデは吝嗇で、その娘ウジェニーは純真で、モルソフ夫人は献身的で、ボンスはお人好しであるという性格設定がまずあって、それが彼らの描写を決定しているというバルザック的創作の原則とは明らかに相入れないものである。

小説中の人物が、時と場合に応じて作者の様々な要求の媒体として繰り返し使用されるならば、その人物の描写の総体が調和のとれたものとなる保証はないし、そこから彼の性格を演繹しようという試みは成功しないであろう。ブルーストの小説における人物描写は、必ずしも常に深く解釈されるにふさわしいものとは言えないのである。

注

使用テキスト

本文ならびに注では、それぞれ巻数とページ数を示した。書簡の場合は *Correspondance* と記した上で巻数と書簡番号、引用ページ、日付の順に記した。また書簡の日付についてはコルブによる推定である場合、鍵括弧 [] 中に示した。

- ・ Proust, Marcel, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1987-1989, 4 vol.
- ・ ———, *L'affaire Lemoine* / éd. génétique et critique par Jean Milly, Genève, Slatkine Reprints,

1994. [Réédition de : *Les Pastiches de Proust*, A. Colin, 1970.]

・ *Correspondance de Marcel Proust* / éditée par Ph. Kolb, Plon, 1970-1993, 21 vol.

・ Saint-Simon, Louis de Rouvroy, duc de, *Mémoires* / édition établie par Yves Coirault, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1983-1988, 8 vol.

- 1) この二者の関連が言及される頻度の割には、これを正面から取り扱った著作の数は実はそれほど多くはない。比較的まとまった著作として次の二点を挙げておくが、いずれも今述べた欠点を免れているわけではない。De Ley, Herbert, *Marcel Proust et le duc de Saint-Simon*, Urbana, University of Illinois Press, 1966. Jullien, Dominique, *Proust et ses modèles. Les Mille et une nuits et les Mémoires de Saint-Simon*, José Corti, 1989.
- 2) « Dans les *Mémoires de Saint-Simon* ». このパスティッシュの本文はミイによる版の p. 257-289.
- 3) この二巻は一冊の中に収められて同時刊行された。印刷終了は1921年4月30日、店頭に並べられたのは同年5月2日のことである。
- 4) 1921年5月12日号。実際の発売はその前夕であり、コルブはそれに基づいて次の手紙の日付を11日と決定している。このスーデーによる書評は、書簡の注の中でコルブも引用しているが、次の版に完全な形で再録されている。 *Le Côté de Guermantes II*, Flammarion (GF-Flammarion; 471), 1987, p. 431-438.
- 5) この三人は姉妹である。またブルーストは、“Mme”の代わりにしばしば“Me”と書く。
- 6) *Correspondance*, XX, lettre 140, p. 259-260. [1921年5月11日水曜夜].
- 7) « Fête chez Montesquiou à Neuilly (Extraits des *Mémoires du duc de Saint-Simon*) ». これもミイによる版の p. 241-246 に収録されている。
- 8) II, 730-773. 晩餐会の場面は II, 715-836. 従って本筋から逸脱してゲルマンの家の人々の特徴を語る問題の箇所は、晩餐の場面のほぼ前半を占める計算になる。
- 9) この第一の場面の中ではフロベルヴィル将軍が「ゲルマンの才気」を話題にする (I, 334)。第二の場面でも作家 G*** とゲルマン公爵がオリヤヌの才気を問題にする (それぞれ II, 503; 536)。
- 10) *Correspondance*, XIX, lettre 312, p. 574. 1920年11月4日付「ル・タン」紙掲載のスーデーによる「ゲルマンの方 I」の書評に対するブルーストからの反応。コルブはこの手紙を同月6日か7日頃のものとして推定している。「ゲルマンの方 I」は1920年8月7日印刷終了、同年10月22日に発売された。(この時点ではまだ「ゲルマンの方 II」は発売されていないことに注意しよう。) 問題の書評はやはり GF 版に収められている。 *Le Côté de Guermantes I*, Flammarion (GF-Flammarion; 470), 1987, p. 468-474.
- 11) *Correspondance*, VII, lettre 124 および XI, lettre 53 参照。
- 12) そういった部分と「単なる」実例が挙げられている部分との違いを論ずることは次の機会に譲りたい。
- 13) *Correspondance*, VIII, lettre 178, p. 331. [1908年12月末頃?]. « J'ai cessé de lire Chateaubriand (dont j'ai fait un pastiche) et suis en plein Saint-Simon qui est mon grand divertissement. »
- 14) *Correspondance*, IX, lettre 11, p. 34. [1909年2月16日] 火曜付。
- 15) 使用版 p. 228. ミイの挙げている根拠はいくつかあるが、1917年11月という日付は、パスティッシュの冒頭を成すタレイラン＝ペリゴール (これはブルーストの同時代人である) の結婚がこの月の17日に行われたことによる。この部分はカイエ52の草稿 (ミイはこれを草稿1としている。同書 p. 251-253 を見よ) 中に現れるが、後年の加筆というわけではないようである。
- 16) *Correspondance*, XVII, p. V 参照。
- 17) 「花咲く乙女たちのかげに」初版、「スワン家の方へ」新版と同時発売。
- 18) この年の10月1日、ブルーストはガリマール宛にサン＝シモンのパスティッシュを送付した、とコ

ルブは言っている (*Correspondance*, XVII, p. 23)。実際、アルマン・ド・ギッシュ宛の次の二通の手紙を比較すれば7月初めにはまだ完成されていなかったサン＝シモンのパスティッシュ（少なくともその第一稿）が10月初めにはブルーストの手元を離れていたことが解る：書簡集同巻122番 (p. 293-295), 154番 (p. 372-373)。コルブ推定の日付はそれぞれ1918年7月1日, 同10月2日の少し前である。第一の手紙の中で、ブルーストは出版予定の模作集用にサン＝シモンのパスティッシュを書き直す、と言っているのに対し、第二の手紙の中では連絡が取れなかったのでサン＝シモンのパスティッシュの中のギッシュに関する部分は失敗してしまった、原稿はもう送ってしまった、と苦情を述べている。本稿 p. 180 参照。

- 19) ガストン・ガリマール宛の手紙にこうある。「En quittant le 102 boulevard Haussmann, j'y ai trouvé les premières épreuves du *Côté de Guermantes*. » (*Correspondance*, XVIII, lettre 112, p. 251. [1919年6月1日または2日].) 前記の1918年12月に仕上がった校正刷りはごくわずかな分量であったようである。従ってこれは最初の完全な校正刷り、の意であろう。
- 20) Pastiche が「文体模写」と訳されることもあるのは周知の通りである。ブルーストの模作については次の論文を参照させていただいた。吉田城「ブルーストと模作—フローバールの文体模写をめぐって—」, 『仏文研究』, XXV, 1994, p. 149-179.
- 21) 使用版 p. 231-234 参照。
- 22) 実際、このパスティッシュは次の一文で締めくくられている « Mais cette digression sur les titres singuliers nous a entraînés trop loin de l'affaire du Moine. » (p. 289)
- 23) Platié, Jacqueline, *La Mode du portrait littéraire en France (1641-1681)*, Champion, 1994.
- 24) このあたりの経緯については同書第一部第二章を参照。
- 25) こういった社交人のポルトレをめぐる活動については同書第二部第四章に詳しい。
- 26) ブルーストがストロース夫人に関する部分を書くにあたって、いかに彼女の気に入るよう努めたかはミイが書簡を引用しながら説明している通りである (使用版 p. 229-231)。ブルーストは彼女に原稿を見せ、気に入るようにできる限りの修正を施し、無理を押して校正刷りにも手を入れている。
- 27) 「ル・フィガロ」紙掲載のもの。
- 28) *Correspondance*, XVII, lettre 112, p. 294-295. [1918年7月1日].
- 29) *Correspondance*, XVII, lettre 154, p. 373. [1918年10月2日の少し前].
- 30) *Correspondance*, XVIII, lettre 24, p. 82-83. [1919年2月1日] 土曜夜付。スーゾ公女はこの手紙に書かれた該当部分を読んで美化しすぎだと返答した模様である。ブルーストは二日後の2月3日、彼女に対し、問題の文章をパスティッシュに入れることを許してくれるよう頼んでいる。
- 31) これらの人物が問題になるのは丁度作品の冒頭部分である。「Cette année-là vit le mariage de la bonne femme Blumenthal avec L. de Talleyrand-Périgord [...]. Il ne voulut pas que sa femme fût assise en se mariant, mais elle osa la housse sur sa chaise et se fit incontinent appeler duchesse de Montmorency, dont elle ne fut pas plus avancée. La campagne continua contre les Impériaux qui malgré les révoltes d'Hongrie, causées par la cherté du pain, remportèrent quelques succès devant Château-Thierry. Ce fut là qu'on vit pour la première fois l'indécence de M. de Vendôme traité publiquement d'Altesse. La gangrène gagna jusqu'aux Murat [...]. » (p. 257-258) プリュメンタル夫人とミュラ家の僭称事件はいずれもブルーストの時代の出来事である。
- 32) *Correspondance*, XVII, lettre 186, p. 444. [1918年11月7日].
- 33) *Ibid.*, p. 445. こう書いた後、さすがにこれは行き過ぎだと感じたものと見えてブルーストはこう述べている。「Si vous n'en savez rien, ne le lui demandez pas, car au fond ce sera plus commode et je serai plus à l'aise pour dire ce que je veux dans mon pastiche. Mon scrupule envers une inconnue est très exagéré (et d'ailleurs elle ne doit pas connaître Me Blumenthal). » 最後の括弧内の文章は、コルブによれば行間への加筆である。ここに挙げたガリマール宛の手紙を単なる冗談と

して無視できないのは、やはり最終的にはブルーストがカーン嬢とブリュメンタル夫人の交友関係をあり得ないものとして自ら否定することによって自分を納得させているからである。友人の交友関係に関する気遣いについては書簡集同巻171番[1918年10月19日]、リオネル・オゼール宛の手紙(p. 406)も参照。ここにやはりオットー・カーンの娘についての言及が見られる。

- 34) *Correspondance*, XVII, lettre 170, p. 402. [1918年10月18日]. 同じ意味のことを述べている書簡は他にも見られる。たとえば以下のものを参照。75番, ガレット夫人宛, 242番, ポール・モラン宛, 253番, ルメール夫人宛, いずれも書簡集第18巻。
- 35) *Correspondance*, XVIII, lettre 218, p. 386. [1919年8月末頃].
- 36) *Correspondance*, XVIII, lettre 239, p. 414. [1919年10月付].
- 37) プラティエ 前掲書 p. 249 以下を参照のこと。
- 38) サン＝シモンの『回想録』の執筆開始は1694年, 執筆が最終的に終了するのは1749年から1750年, 公爵の死去は1755年のことである。最初の出版は1788年に行われた(新ブレイアッド版の序文による)。
- 39) この点についてプラティエは興味深い指摘をしている。社交生活において書かれるポルトレと回想録の中に現れるポルトレというふたつのジャンルのどちらに属するかで作品に大きな差が生じる。モデルも作者も同じでジャンルが違う場合, モデルが同じで作者が違うサロンのポルトレの間に生じるより大きな違いが生まれる。また, 同じモデルを違う作者が書く場合, 作品間の差異は回想録における方がもう一方のジャンルにおけるより大きい, というのである(前掲書第三部第四章 p. 647-658 参照)。これは回想録の作者の視点の独自性を物語っている。
- 40) サン＝シモンの視点の問題についてはなканずく次の著作を参考にした。Coirault, Yves, *L'optique de Saint-Simon. Essai sur les formes de son imagination et de sa sensibilité d'après les "Mémoires"*, Armand Colin, 1965.
- 41) *Correspondance*, XVIII, lettre 25, p. 84. [1919年2月3日月曜夜]. スーゾ公女宛。
- 42) II, 730-732.
- 43) あるいは身体, 精神と魂の三つに分けることもあった。こうした技法の起源は, ヴェネツィアの外交官の職務としての人物描写作成のテクニクに見られる。当時の事情からして相手国の要人の肉体的特徴の描写は, その性格の報告と並んで欠かせないものだったのである。この点については次を参照のこと。Van der Cruysse, Dirk, *Le Portrait dans les « Mémoires » du duc de Saint-Simon*, Nizet, 1971, p. 32-34.
- 44) たとえばダンタン公爵(モンテスパン夫人の息子)の例(II, 976-977)を見よ。これはサン＝シモンの『回想録』では決して例外的なことではない。
- 45) ブレイアッド版は, この場面の女主人の名はタイプ原稿でバルム大公妃からサン＝トゥーヴェルト侯爵夫人に直されたと指摘している(I, 316, var. c 参照)。
- 46) 問題のテキスト部分に見られるバルム大公妃の描写の一部は, ブルーストが習作期に発表した作品, « Un salon historique. Le salon de S.A.I. la princesse Mathilde » (1903年2月25日付「ル・フィガロ」紙に掲載, ブレイアッド版 *Contre Sainte-Beuve*, p. 445-455 所収) を下敷きにしている。小説中のバルム大公妃はこの記事におけるマチルド大公妃を滑稽化している一種のパロディーである。これも作者の視点の相違が作品に及ぼす影響を示す一例である。尚, マチルド大公妃は1904年に亡くなっていることに注意。
- 47) サロンのポルトレについてはプラティエの前掲書 p. 36, p. 280 などに詳しい。サン＝シモンのポルトレにおけるパラレルの手法に関してはコワローの前掲書第一部第一章(p. 41-76)を見よ。
- 48) III, 352-353. このモルトマル公爵は, モンテスパン夫人の甥の息子である Louis II の方。
- 49) II, 972. モンテスパン夫人の姪の中でも特にその才気について言及が多い人物として, Castries 侯爵夫人(I, 353 他), Sforza 公爵夫人(V, 256 他) が挙げられる。
- 50) I, 336.

- 51) II, 674.
- 52) II, 741-742.
- 53) II, 972.
- 54) III, 67.
- 55) V, 537-538. この逸話はゲルマン公爵夫人がエビネー夫人を訪問すると、すでにそこを訪れていた他の客たちがこぞって逃げ出したという小説中のエピソード (II, 753 sq.) を思わせる。
- 56) *Correspondance*, XIX, lettre 280, p. 530. [1920年10月18日]. その一部はこの後引用する。本論 p. 188 参照。
- 57) ただしストロース夫人はかなり物わかりの良い人物だった様である。このあと見る様に、ローラ・エーマンが自分をオデットのモデルにしたと書いてよこした苦情への返答の中でブルーストは、オデットのサロンの花が自分の所のものをモデルにしていることを認めたさる夫人はそのことでお礼を述べさえた、と書いているが、これはストロース夫人のことである (書簡集第21巻146番)。ローラ・エーマンが他ならぬオデットのモデルにされたと言って怒っていることを思えば理解ある態度であろう。
- 58) *Correspondance*, XX, lettre 98, p. 194-195. [1921年4月18日あるいは19日]. モンテスキュー宛。コルプが注で述べている通り、ブルーストはアルビュフラとの諍いについては別の書簡でこれとは異なる説明をしている (書簡集第18巻253番 [1919年10月27日の少し後], ルメール夫人宛)。この1919年の手紙では、アルビュフラと姻戚関係にあることを知らずにサン＝シモンのパステイッシュでミュラ家のことを悪く言ってしまったので彼が怒っているのだとほのめかしている。コルプは注で、1919年当時、アルビュフラは小説中のサン＝ルーとラシエルを知らなかったであろうと言っている。真相はどうあれ、こちらの手紙の中ではブルーストはアルビュフラが怒ってもしかたないと考えているようであり、その点、引用した手紙中でアルビュフラの勘違いだと言っているのとは態度が異なる。
- 59) *Correspondance*, XVIII, lettre 75, p. 182. [1919年4月25日金曜].
- 60) *Correspondance*, XXI, lettre 146, p. 208-209. [1922年5月18日木曜夜].
- 61) III, 73.
- 62) III, 168.
- 63) III, 240 sq.
- 64) *Correspondance*, XIX, lettre 280, p. 530. [1920年10月18日].

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。